
密室にて

ゴンギツネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

密室にて

【Zコード】

Z9213Z

【作者名】

ゴンギツネ

【あらすじ】

三上悟が帰宅すると、妻が死んでいた
密室で。その犯人は
誰なのだろうか。

彼 三上智は、鍵を開けた。

「敏子 つ！？」

妻の名前を呼ぶが、妻は答えない。寝てしまつたのだろうか。しかし、敏子は毎日起きて出迎えてくれた。何故だらうか？

「敏子 つ！？」

再び呼ぶが、声は帰つてこない。靴はここにあるがキッキンへ行く。

まず目に入つたのは、赤い液体。そして、その液体で濡れた包丁。その赤い液体 敏子の血で彩られた部屋の中で、敏子の青白い肌は、大きく存在感を醸し出していた。

思わず、尻餅をつく。敏子の血が、少し指先についた。

「ひや、110番……」

呼び出し音が、音のない部屋に響く。3回田で頼り甲斐のある声が聞こえた。

KEEP OUTの文字が印刷されている黄色いテープ。ドラマではよく見たが、実際見るのは初めてだ。

三上智は、親の反対を押し切つて結婚した。最後には、親も納得してくれたのだ。そして、部屋の間取りを皆で決めたのになぜこうなつたのか。平和な 暖かな生活。それが、雪崩れのように音が立て崩れていくのを感じた。敏子は 雪は崩れたら戻らない。温かさを、皮膚が感じた。一筋に涙が垂れる。涙が風で冷えて、血の気が引いた顔をさらに冷たくした。

「三上さん……」

遠慮がちな声で、婦警が話しかけてきた。

「なんでしょうか？」

声が震えるが、声は出た。

「大変恐縮なのですが、発見した時の様子を教えて下さい」

本当に遠慮のない。三上は腹を立てたが、その時の状況を詳しく話した。

「ありがとうございました」

話し終えたのは、10分後だった。僅か数分の出来事だが、動搖したせいか、途中で思い出せないこともあった。それを、婦警は丁寧に聞くと、メモを取つた。最後に、お悔やみの言葉とやらを言つたが、敏子が死んだ事実を受け止められない自分には、むしろ逆効果だ。

もう、生きていっても意味が無いのかもしれない。敏子こそが、俺の運命の人だというのに

運命の人。実際、そうなのかもしれない。あれを運命と言わず、なんというのか。智は、敏子との出会いを脳裏に描いた。

目の前を、3人組が歩いていた。

「おお、三上じやないか。今日こそは、恨みを晴らさせてもらおつか」

木村綱が言う。昔、因縁を付けられたのだ。自分から当たつて、金でもせびろうとしていたのかもしれない。そんな木村を、反射的に蹴つた。木村は、3メートルは吹き飛んだ。そして、勝手に因縁をつけたというわけだ。少しばかりかたと思う。しかし、ナイフまで持ちだしてくる必要性はないはずだ。

木村たちは、ナイフをちらつかせた。ナイフに、蛍光灯の光が反射する。三浦は、まず最初に、木村の顔面を蹴つた。パシッ！ と、小気味の良い音が鳴る。

「テメエ……。本気で死ねよ……」

木村が吐き捨てるよろよろと咳く。後ろから気配。振り返ると同時に、回し蹴りをする。襲ってきた奴の両手を踏む。これで、こいつは脱落。

次に、もう一人の胸 心臓付近を肘で突く。そいつが咳き込むのと同時に、鳩尾に踵落かかとおとしとしをする。地面に這いつぶばつて悶絶している彼に近づくと、三浦は両手の骨を碎いた。

そして、振り返りざま、裏拳を木村の頬に入れる。木村の両手を踏む。木村は絶叫するが、三上は放おつて置いた。しかし、油断していたのがいけなかつた。仲間の一人が、コンビニエンスストアから出てきたみたいだ。気づいたら、腹から血が出ている。……ナイフを抜けば大量出血だ。目の前には、女性。

「……すいません。119番してもらえませんか？ 腹から血が出てるんで」

これが、安藤敏子との出会いだつた。このあと、三上はお見舞いに来ていた敏子と付き合つことになる

釜崎優奈かまざきゆうなは、電話を受けた。

「はい、こちら釜崎探偵所。……え？ はい。今行きます」

こここの近くで、殺人事件が起きたという。しかも、密室殺人だそうだ。

場を見てみると、死体は片付いていたが、部屋は血まみれで凄惨なことになつていた。

しばらく調査をすると、三上の母親はこの結婚に反対していたという。しかし、急に認めた。これはおかしい。徐々にならわかるが、急に。もしかしたら、彼女は三上敏子を殺害するつもりだつたのかもしれない。

さらに話を聞くと、彼女 三上玲子れいこは、何故だかわからないが、鉄のサムターン錠にしようと言つていたみたいだ。鉄 優奈の脳

に、一筋の光明が見えた。

まさか。そういうことなのか。優奈は、覚悟を決めて、乾いた口を動かした。

「三上玲子、または三上裕一^{ゆうじ}か、その一人の共犯です」

智は、釜崎優奈の話に耳を傾けた。

「まず、この事件ではサムターン錠が鉄なのが鍵です。三上玲子は、『鉄のサムターン錠にしよう』と言いました。何故、鉄に拘るのでしょうか。別に、アルミでもプラスチックでも構わないのではないでしょうか」

たしかにそうだ……。しかし、どういう意味なのだろうか。

「鉄の特徴といえば、磁石にくつつく、金属光沢がする、電気を通す、ぐらいでしょうか。今回は、『磁石にくつつく』が、重要です。犯人は、磁石がくつついた重い棒状のものに糸を通したものを使意した。そして、覗き穴にそれを入れる。そのあと、犯人はそれを落としました。そうしたら、棒状のものが磁石によつてサムターン錠に引き寄せられます。そして、勢いでサムターン錠が閉まる。あとは回収するだけです。家の設計を詳しく知る人でないと、サムターン錠が鉄だということを知らない。そうなると、三上悟さん、三上敏子さん、三上玲子さん、三上裕一さんしか犯人になりえません。死亡時刻には三上悟さんのアリバイはあるし、敏子さんはああゆうふうに自殺できるはずがない。だから、犯人は、三上裕一か玲子です」

(後書き)

矛盾や、これはできないんじゃないやない? ってこうやつがあったら、教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9213z/>

密室にて

2011年12月28日21時51分発行